

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（141）

——名医もヤブ医者もいない時代？——

AIに看取られる日 2035年の「医療と介護」

奥 真也 著

朝日新書 税込定価 957円 2025年9月刊行

「気楽に読めて、査定力もアップする本を！」というコンセプトのブックガイド、今回のテーマはAIと医療。AIに診てもらう日が来る？それも「看取られる」日まで？

挑発的なタイトルに釣られて手に取ると、思った以上にリアルで冷静な未来図が描かれていました。著者はベストセラー『未来の医療年表』の奥真也氏。今回は「名医」も「ヤブ医者」も駆逐されるという、ちょっと怖い話です。

名医もヤブ医者も、まとめてAIに消される？

かつて「名医」と呼ばれたのは、豊富な知識と経験、時に神がかった直感で診断・手術をこなす医師でした。一方の「ヤブ医者」は誤診や不要な治療で患者を振り回す存在。

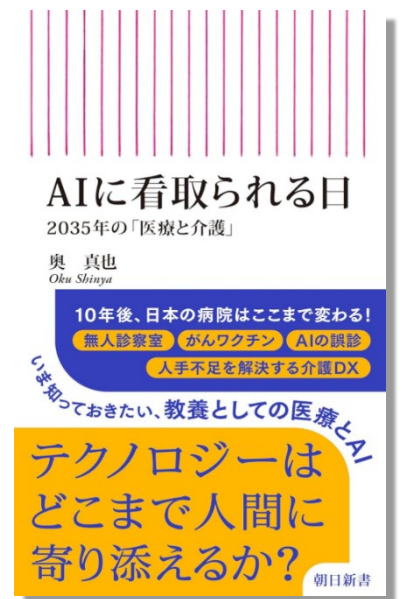
しかしAIは数百万の症例を学習し、人間が一生かけても得られない知識を瞬時に共有できる。結果として、「名医の名人芸」も「ヤブの暴走」も同時に駆逐される——というのが本書の骨子です。

もちろん「人にしかできない寄り添い」や「対話」は残ります。けれども、診断や治療の標準化はもはや避けられない。ガイドラインを誠実に適用できる人こそが評価される時代になる、と奥氏は語ります。

診察室の風景も激変

すでに医療現場では、診療ガイドラインの外部化、AIによる音声認識やカルテ入力支援（kanaVo、Warokuなど）が始まっています。本書が描く2035年の診察室には「患者・医師・問診ロボット・ChatGPT」が同席し、AIが患者の曖昧な訴えを整理して医師に渡す光景が広がっています。

「熱が出て……あさって子どもの発表会に行きたくて」といった患者の希望も含めてAIが要約。医師はすぐに本題に入れる。効率化というより、むしろ「人間同士の対話」に集中できる仕組みなのです。



保険業界への接点① ユビーAI問診と告知書

この未来像、実はすでに一部は現実化しています。国内で普及が進む「ユビーAI問診」は、患者がスマホで回答した内容をAIが整理して医師に提示する仕組み。これ、生命保険の「告知書」と酷似しています。

契約者がAIに導かれて病歴や服薬歴を答えれば、記載漏れや虚偽告知を減らせる。標準化された質問フローは、後日の紛争予防にも有効です。査定部門から見ても、「AI告知」は将来の本命ツールになるかもしれません。

保険業界への接点② 次世代医療基盤法とデータ活用

もう一つ重要なのが、データ活用を阻んできた「個人情報保護法」の壁。本書でもその硬直性が批判されています。その打開策として2018年に施行されたのが「次世代医療基盤法」。匿名加工を条件に医療データを研究利用できる道が開かれ、AI診断や新薬開発の基盤が整いました。

この流れは保険業界にとっても他人事ではありません。医療データはリスク予測や健康増進型保険の商品設計に直結します。AIが医療と保険をつなぎ、契約者にフィードバックを返す時代はすぐそこまで来ています。

まとめ：AIで駆逐されるのではなく、AIを使いこなす

かつてAI創成期に「真っ先に駆逐される職業」の上位に挙げられたのが、保険の引受判断を担うアンダーライターでした。けれども現実には、AIが査定者を消すのではなく、むしろ強力な道具として横に並び始めています。

名医もヤブ医者もAIに飲み込まれるかもしれませんが、保険の世界では「AIを使って正確に・効率的に・透明に」査定する人材こそが生き残る。そうした意味でも、本書は単なる医療の未来図ではなく、私たち自身の仕事の未来を映す鏡といえるでしょう。

さて、読後のおすすめ行動？ AIに駆逐されるのを恐れる前に、まずは[ユビーAI問診の公式サイト](#)をのぞいてみますか。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2025年10月）

)